

日本古典文学全集

夜の寢覺

校注・訳 鈴木 一雄

小学館・刊

夜の寝覚

日本古典文学全集 19

昭和49年10月31日 初 版発行
昭和51年 7 月31日 第二版発行

校注・訳者 ^{すず}鈴 ^き木 ^{かず}一 ^お雄

発 行 者 相 賀 徹 夫
東京都千代田区一ツ橋2-3-1

印 刷 所 大日本印刷株式会社
東京都新宿区市谷加賀町1-12

発 行 所 株式会社 小 学 館

東京都千代田区一ツ橋2-3-1
〔郵便番号〕101 〔振替〕東京 8-200
〔電話番号〕編集 東京 03-264-8571
製作 東京 03-230-5333
販売 東京 03-230-5739

© K. Suzuki 1974
Printed in Japan
(著者検印は省略いたしました)

造本には十分注意しておりますが、
万一落丁、乱丁などの不良品の場合、
おとりかえいたします。







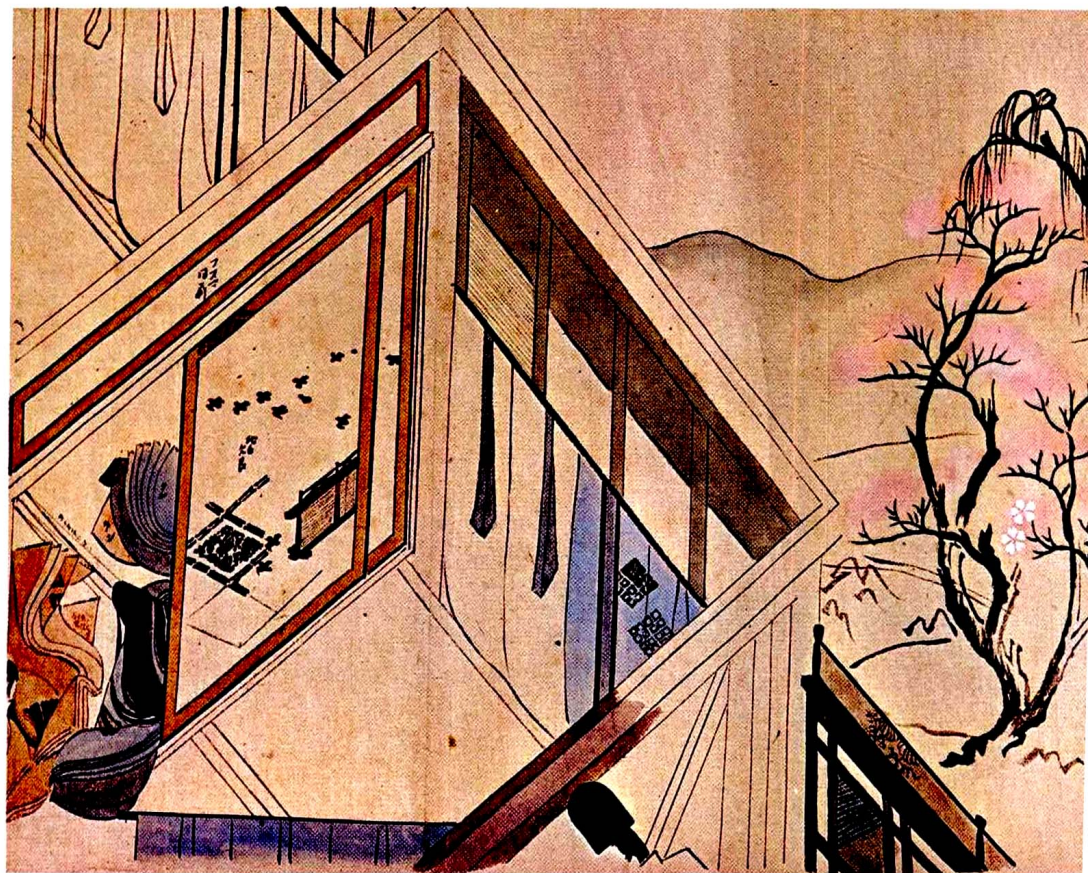
国宝『源氏物語絵巻』につぐ名品として知られる濃彩の作り絵で、十二世紀ごろの成立とみられている国宝の絵巻である。当初の分量は不明だが、絵四、詞書四段が現存し、この中、第一図は詞書を、第四段は絵を欠き、第一―第三段の詞書の順序は錯乱し、かつ、一部分欠落がある。現存する絵と詞書のすべては、末尾欠巻の物語第二十三年三月ごろから同年六月ごろまでの事件を扱っており、本文末尾欠巻の貴重な資料の一つである。写本としては、東京博物館本、国会図書館本、会田富康氏蔵本の三本が、現在、知られている。前の二つは、ともに、住吉具慶の模本からの模写である。一方、会田本は、年代

的には新しいものと言われるが、きわめて精密な剝落写しで、よく大和本の面影を伝えている。

第一図は、物語二十三年春、出家後の寢覚の上を、夫や家族が訪れた条を描いたもの。画面左端、障子の陰に寂しい横顔をわずかに見せるのは出家後の寢覚の上、対座しているのは老閑白中の君、画面中央の烏帽子の男は若閑白、右側の笛の少年は現存本末尾で生まれた寢覚の上の次男、後ろ向きの笙の少年は侍童、扇の子は中の君の子であろう。華やかな美しさで知られる『寢覚物語絵巻』の中でも、第一図は最も華麗であり、その中心となるのは、右半分に描かれた数本の桜で、美しい蘇芳色の葉に包

まれて装飾的に大きく描かれた花は、『枕草子』『木の花は』の段の「桜は、花びら大きに、葉の色濃きが、枝細くて咲きたる」(三巻本)の文をそのまま絵にした感があり、平安末―鎌倉の絵巻の桜の中で、恐らく、最も美しいものであろう。この桜はすでに散り方で、白い花片が片々として画面に舞っている。それは、そのまま、桜によそえられた女主人公の人生の春の果てを表わずかに見え、母との再会を喜ぶ少年を中心にした花樹を配した華麗な右半分と、尼姿の女性を中心に沈んだ色を基調とし、悲愁の気の漂う左半分と、相反する雰囲気気の二つの画面を巧みに一つにつないでいる。

(小松登美)



天和二年、住吉具慶は、『寝覚物語絵巻』を模写した。この住吉本からの模写本が東博本と国会本とで、両本から住吉本の面影を偲ぶと、具慶は模写に当たり、まず、詞書と絵とを別々にまとめ、絵は精密な模写ではなくおよその面影を伝えるにとどめ、詞書は読解不能の所は空白とした一かなり誤脱もある一様子である。東博本は、天保二年、狩野養信が模写したもので、国会本とともに、今から約三百年前の『寝覚物語絵巻』の状態を知り得る点で貴重な資料である。殊に第一回の場合、現在の大和本や会田本では不明瞭な尼額も東博本、国会本では、より明らかに認め得る。

(小松登美)



『寝覚物語絵巻』の詞書は、筆者ならびに書写年代は不明であるが、書風からみて、平安末―鎌倉初期ごろのものと考えられている。「あさちがすゑ」で始まるこの条は、現在では、第一図のすぐ後、第二図詞書冒頭の位置にあるが、その内容からみて、本来は、第三図の詞書の冒頭だったと考えられる。筆者は不明ながら、のびやかな筆跡である。

(小松登美)



二十三年四月上旬の早朝、忍び歩きの帰途のまさこは、美しい藤の花と箏の音とに惹かれて、冷泉院の故左大臣殿の女御の邸に立ち寄った。第二図は、この情景を描いたもので、二紙から成り、第一紙は約五丈幅で、家屋の一部と、冠をかぶった男の頭が描かれている（この第一紙がもとと第二図の一部かどうかは、不明）。

第二紙は、寝殿と、その前の松にからまる藤、および三人の女性が描かれている。高欄に寄りかかって藤の花を見上げるのは童女、和琴を弾く女性は裳を着けているので女房、対座して箏を弾く女性は奥に坐っている点や、そばに几帳がある点からみて、和琴の女性より身分が高く、主人筋の女性で、まさこがこの邸に



寝覚物語絵巻 第二図

大和文華館蔵

立ち寄ったのは、もともと
この女の箏の音に惹かれて
のことだった点からみて、
恐らく、この女性が、第二
図のヒロインであろう。こ
の人が誰かは不明だが、あ
るいは、後の東宮の宣耀殿
女御でもあらうか。

(小松登美)



二十三年の初夏、女三の宮とまさこの恋の理解者である中納言の君（女三の宮の女房）は、里に出た。まさこは中納言の君を訪れ、一夜を語り合った。この情景を描いたのが第三図で、詞書の「やり水にかはづのこゑ……」を受けて、画面右には、遺水（いづみ）の流れる庭が描かれ、他に季節を表わす花とてない画面に巧みに季節感を添えている。画面左半分には、吹き抜き家屋が描かれ、その廂（ふし）の間の簾（すだれ）ごしに、裾（すそ）は外に出た几帳（きやう）とその陰に坐る中納言の君の後ろ姿（この上に簾が描かれ、簾ごしに見る女の姿の美しさがよく表わされている）、その手前に開け放たれた妻戸とまさこの衣服の一部が見え、まさこは、すめられたおましをわざと



寢覚物語絵巻 第三図

大和文華館蔵

避けて坐ったのか、奥に紅
のふちどりも鮮やかなおま
しが見える。(小松登美)

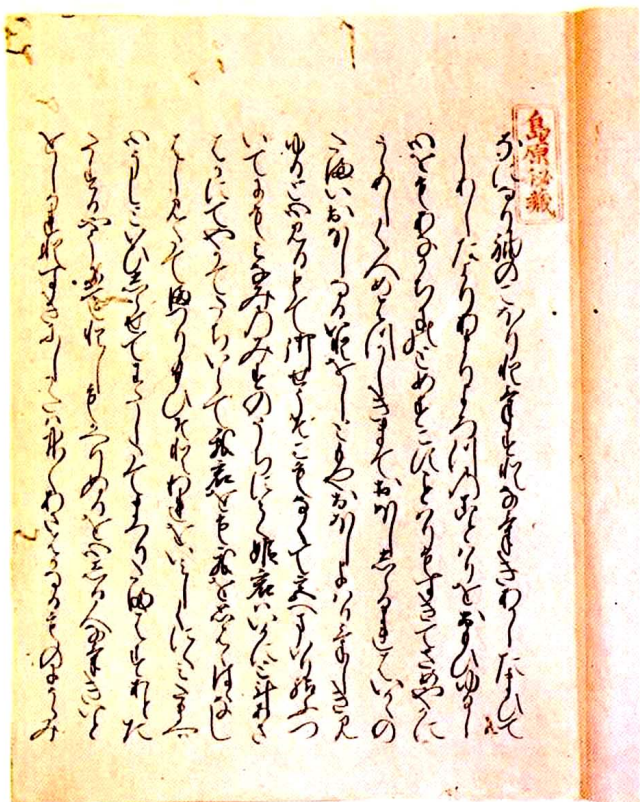


冷泉院は、死んだとばかり思っていた寝覚の上の文を山の座主から受け取った。第四図はこの情景を描いたもので、脇息に寄り、寝覚の上の文を前に広げたまま、涙を押えかねている僧形の人は、出家後の冷泉院、対座しているのは山の座主（巻一に出て来る法性寺の僧都の後身とみられる）である。開きさした障子には蓮の花（旧暦六月の花）が描かれており、仏道に心を澄ます院の境遇を表わすとともに、僧形二人の寂しい画面に彩りを添え、かつ、この事件が起きた季節をも暗示している。（小松登美）

本書の底本。縦二七・三
 横二〇・三、袋綴五
 冊本。昭和三十五年、島原
 市における松平文庫の発見
 のうちでも最も注目された
 ものの一である。『夜の寝
 覚』五卷本系統の最善本、
 寛文・元禄のころの書写で
 ある。斐紙薄様料紙、一面
 各十二行、一行の字詰は二
 十一、二字から二十七、八

字ほど。巻序は誤っていて、
 本書では五、四、一、二、
 三の順に訂正してある。各
 巻本文首尾に「島原秘蔵」
 の長方朱印、各巻末には
 「尚含源忠房」の長方藍印
 と、「文庫」という陰刻横
 槽円朱印が押されている。
 島原初代藩主松平忠房が蒐
 集書写せしめたものの一。

(巻三巻頭)



島原本 夜の寝覚 巻頭・巻末
 島原公民館松平文庫蔵



(巻一巻末)

目次

解説

後期物語文学の世界 三

夜の寢覚 一五

凡例 三三

本文

卷一 三七

卷二 一四五

中間欠巻部分 概略 二四七

卷三 二五一

卷四 二四三

卷五 四三三

末尾欠巻部分 概略 五七〇

校訂付記 五七四

付 録

系 図	五八
寢覚物語絵巻	五九
主要参考文献	六四

口 絵 目 次

寢覚物語絵巻(大和文華館蔵)	一	前田家本・神宮文庫本夜の寢覚	一一
寢覚物語絵巻(東京国立博物館蔵)	三	島原本夜の寢覚	一二
寢覚物語絵巻(大和文華館蔵)	五		